

反畑誠一（たんばた・せいいち）先生

音楽評論家 立命館大学客員教授

※講師紹介は、前ページに記載

## 《講義概要》

本講座のコーディネーターである立命館大学の反畑誠一客員教授が、学生スタッフによってビデオ撮影された全15回のアーカイブ映像を編集したダイジェスト版を用いて貴重な講義を振り返り、後期の総括を行った。各講師をコーディネートした理由や各講義の重要なポイントを伝え、コンテンツ産業の現状や課題について復習するとともに、引き続き動向に注目し、学習を深めていって欲しいと伝えた。続いて、反畑氏が当講座を担当されるきっかけとなった10年前の講義内容を紹介し、演出やスタッフ、キャスト等全てアジア人で構成された日本発信の創作ミュージカル3作品の概要や成果、アジア・ミュージカルの実態について説明。当時10年後を見据えて示したアジア・ミュージカル市場の課題について、現状と照らし合わせて解説した。最後には、心身ともに健康で勉学に励み、社会へ飛び立って欲しいと受講生を激励した。

この日は、10年間本講座にご尽力賜り、今年度で本学規定の定年を迎えられる反畑誠一客員教授の最後の講義日であり、講義終盤には立命館大学産業社会学部の竹内謙彰副学部長が御礼の言葉を述べ、「一流を知る、本物から刺激を得ることを追究された講義であり、反畑先生はコンテンツビジネス界を見渡す窓を開き続けてくださった」と伝えた。さらに、本講座の担当教員である産業社会学部栗谷佳司准教授より花束が贈呈され、盛大な拍手のうちに幕をおろしました。



## 《受講生の感想》

●この講義を受講することで現在重要視されているデジタル・コンテンツ産業について様々な視点から深く知ることができた。デジタル媒体が発達し、それにコンテンツをのせることで産業が拡大した。しかし、それに伴い著作権に関する諸問題が生じていることも学んだ。今後デジタル・コンテンツ産業を幅広く展開していくためには、いかにそれらの問題やデメリットを小さくしていくかが重要だと感じた。また、アニメ・マンガ等海外に売り込める様々なコンテンツがあると知り、海外の消費者のニーズを把握し、長期的な視点でビジネスモデルを築くことが大切だと思った。

立命館大学・産業社会学部・3 年生

●総括ということで、全講義を VTR で振り返ることができたのは記憶を引き出すのに有効な手助けとなって非常に嬉しかったです。通してみると、やはり一貫して同じワードが出ていたのだなと思いました。「デジタル」や「著作権」はもちろん、「海外」「ネット」等。授業タイトルにもあるように「音楽」分野にゆかりのある方々ばかりにも関わらず、音楽に限らない多面的なお話が聞けたことは本当に勉強になりました。

立命館大学・映像学部・2 年生

●この半年間、様々なメディアから見た日本のコンテンツビジネスの状況を聞いてきて、その変容の仕方は著しいと感じました。スマートフォンなどのメディア機器の普及に伴い、コンテンツに接する機会が増えてきたために、著作権問題やリテラシーなど、様々な課題が残されています。それらをどのように乗り越え、どのようにビジネスモデルを築いていくのかが重要なのだとわかりました。日本には独自の文化があり、多様なコンテンツを生み出しており、世界でも注目を集めているので、これを今後さらに発展させていくためにも、私たちの世代が目に向けていかなければならないと実感しました。 立命館大学・映像学部・2 年生

●一つ一つの講義の先生方のお話はとても濃いものであったと感じます。これからコンテンツ産業に関わりたと思っている私にとっては、この講義を元に自ら考え発展させていかなければいけないと思いました。最後の講義で TPP の問題というホットな話題がありましたが、TPP とコンテンツの関わりなど考えたことがありませんでした。あらゆる話題にアンテナを張り考えていくことの重要性があると思いました。

立命館大学・映像学部・2 年生

●これまでの講義を振り返り、様々な観点からコンテンツについて考えてみることができた。自分がそれまで思っていたこととは違う面が見えてきたり、講師の方々のお話を聞き、逆に自分の中で疑問に思うことも出てきた。この講義を通して、自分自身の思考を持つことが少し身に付いたように感じる。この講義で学んだことを自分の中できっちりと解釈し、それに対して自分の考えを持ち、これから知ることについてもそのように対応していきたいと思う。

立命館大学・映像学部・2 年生

●この講義ではたくさんの活躍されている有名な方々のお話が聞け、色々と考えさせられる面が多かった。普段あまり著作権のことにに関して深く考える機会にはなかった。また、日本のコンテンツ事情を知る機会にもなった。時代に見合った幅広いテーマのコンテンツを学べたと思う。この講義はただお話を聞いて終わりではなく、その後自分でも考える必要があり、全体的に難しいテーマが多かったものの、とても勉強になるものが多かった。

立命館大学・映像学部・2 年生

●デジタルコンテンツに関わる方の活躍フィールドはとても様々だと感じた。その中ですべての方にあてはまるのは、音楽・WEB・アニメーションなどの日本を代表する文化的コンテンツに情熱をそそぎ、今後の更なる発展に向けた取り組みをなされているということ。私はメディアを専門に専攻しているわけではないが、講義を受けた事によりとても興味が湧いた。今後も日本のほこるポップカルチャーについてより学びを深めたいとともに、今後社会へ出て行くにあたり私も何らかの形で関わりたいと強く思う。

立命館大学・産業社会学部・3 年生

●この講義を通して様々なコンテンツについて考えるきっかけを得たと思う。多様化していくコンテンツ産業において現在進行形で様々な取り組みがされているということを知ることができて、非常に有意義な時間であった。ネットの発達で世界との境界線がフラットになってきていて、その中で日本のコンテンツをどう広げていくのか、未熟な思考ながら色々と考えさせられた。特に著作権の問題は日本国内だけの問題ではなく、大きな世界の価値観で考えなければならないと思う。コンテンツの受け手と作り手、双方の利益になるような形態を考えなければならない。

立命館大学・産業社会学部・3 年生